

【暗証聖句】「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」創世記3章15節

【日・蛇】

創世記3章1節「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

創世記3章1節に、突如蛇が登場し、女（エバ）を誘惑する場面が出てきます。この蛇が単なる蛇ではなく、蛇の姿を取って近づいてきた悪魔であることを私たちは知っています。黙示録12章7～10節にかけて、次のように書かれてあります。

「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」

悪魔は天で神様に反逆し、戦いを引き起こします。しかし、天の軍勢に勝てず、地上に投げ落とされてしまいます。この悪魔のことを、「巨大な竜」とか「年を経た蛇」と表現されており、全人類を惑わす者であることが記されています。地上に落とされた悪魔は蛇の姿を取り、まず最初の女性であるエバを惑わしたのです。なぜ悪魔が蛇の姿を取ったのかといえば、聖書によると、「神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった」からです。また最も賢いだけでなく、「最も美しく、黄金色に輝き、空を飛んでいた」（人類のあけぼの上 P39）ようです。さらに、その蛇が女に話しかけたということは、少なくとも最初の蛇は人間と会話できたということであり、エバはそのことに全く違和感を持っていません。つまり、現在の蛇とはまるで別物であることがわかります。コリントの信徒への手紙二1章3節では、「エバが蛇の悪だくみで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配しています」とあるように、蛇すなわち悪魔の惑わしは、最初のエバに対してだけでなく、今もなお続いているということがわかります。蛇が姿を変えて話しかけてきても何の違和感も持たなかったエバのように、サタンの誘惑はあまりにも巧みなのです。

【月・禁じられた木の実】

「園のどの木からも食べてはいけないなどと神は言われたのか」（創世記3章1節）。これが蛇の最初の語りかけでした。これは誘惑の言葉と言うよりも、単なる問いかけです。けれどもその問いかけには深い下心が秘められているのです。神様は人間に、「園のどの木からも食べてはいけない」などと言われませんでした。まったく逆で、創世記2:16を見ると、「園のすべての木から取って食べなさい」と言われているのです。「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と付け加えられました。蛇はそのことをちゃんと知っていました。知っていた上でわざと、「園のどの木からも食べてはいけないなどと神は言われたのか」と、いかにも驚いたように言うのです。まるでそれは、「そんなのひどいじゃないか、君たちがかわいそうだ」といわんばかりです。神様は人間に自由を与えられました。その自由の中であって、ただ一つだけ、「園の中央に生えている木の実だけは、食べてはいけない」と言われました。これは神様に対する人間の愛と忠誠心を試みるものでしたが、言うなれば、大きな自由の中に小さな禁止事項をひとつだけ設けられたということです。悪魔はそのことを知った上でわざと、神様は「どの木からもとって食べてはならないなんてひどいことを言ったのですか」と言うことによって、人間の思いを、神様から与えられている大きな自由よりも、その小さな禁止の方にだけ向けさせ、神様のもとで生きることは、がんじがらめに縛られて、全く自由のない、人間らしくのびのびと生きることができない生活なのではないか、そういう思いや疑問を人間の心に起こさせようとしたのです。

さて、ここで興味深いのは、エレン・G・ホワイトの解説なんですが、そこには次のように書かれているのです。「園のどの木からも食べてはいけないなどと神は言われたのか」と蛇に問われたとき、「エバは、自分の心の思いが声となったのを聞いたような気がしてはっと驚いた」と書いてあるのです。罪の誘惑というのは常に、私たちの心の中にあるものから出てくるということなのです。だから、誘惑となるのです。最初の罪の始まりも、このようにして始まったのです。そして悪魔は、「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」（創世記3:4, 5）と、神様の教えを堂々と否定し、禁断の木の実を食べることで神様のようにになれるのだと、それがまるで有益なことであるかのように誘惑したのでした。

【火・神の御前から隠れる】

創世記3:8～10「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

罪を犯した結果、人はどうなったのでしょうか。神様が恐ろしくなり、隠れたのです。つまり、神様との美しい平和の関係が壊れてしまったのです。それゆえ罪の赦しとは、神様との平和な関係をもう一度回復することを意味

するわけです。主は、アダムに「どこにいるか」と問われました。この問いかけは、私たちの罪を自覚させるものです。罪の結果、神様から遠く離れてしまったのだということを知覚させるのです。そして、この神様の呼びかけに応じていくところに、私たち人間と神様との関係がもう一度回復されていく出発点があります。「あなたはどこにいるのか」という神様の問いかけは、わたしたちの罪を断罪し、責めているものではありません。ただ、ご自分のもとに戻ってきてほしいという思いが込められているのです。アダムは食べてはならないと言われた木の実をなぜ食べたのかと問われると、それをエバのせいにしてしまいました。平和な愛の関係が壊れてしまったのは神様と人間だけではなく、夫婦の関係、ひいては人間同士の関係も壊れてしまったことがわかります。しかも、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が」(3:12)と、神様にまで責任転嫁する始末です。こうして、罪は何もかも関係を壊していくのです。

また、創世記3章7節に「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」とあるように、アダムとエバは罪を自覚すると共に、その結果のみじめな自分たちの姿を知りました。自分で「いちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆う」、つまり罪を覆うという行為は、行いによる義を表しています。しかし、いちじくの葉はやがて枯れてしまうように、行いで罪を覆うことはできません。キリストの命だけが、私たちの罪を覆うのです。

【水・蛇の宿命】

創世記3章14、15節「主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。」

最も美しく賢い生き物であった蛇は、地を這い、最も呪われるものとなります。かつて空を飛んでいた蛇は、このようにして地を這うようになり、多くの人々から嫌われるようになっていったのです。また、悪魔に対しては、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く」と預言の言葉が語られています。悪魔及び悪魔に支配された人間と、イエス様及びイエス様を信じる神の民の間に、敵意を置くことがあります。敵意とは憎しみや対立とも訳せる言葉ですが、神と悪魔、善と悪、神の民と世の人々の間に、相いれることができない壁を主が置かれたのです。本来、このような区切りなどなかったはずの世界に、相いれないものが生まれたわけですが、これは神の民を守るためでもあります。ただ、黙示録12章17節を見ると、「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」と、終わりの時代にはこの対立がますます激しくなることが預言されています。

しかし、最終的な対立の結果については、すでに決まっています。「彼・イエス様はお前・悪魔の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」とあるように、悪魔はイエス様を苦しめ、十字架にかけすることに成功しますが、イエス様は3日目に勝利して復活し、逆に悪魔を完全に滅ぼす時が来るといえることです。ローマ16章20節では、「平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう」と書かれています。

【木・人類の運命】

創世記3:17~19「神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は灰とあざみを生えいでさせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」

アダムとエバが罪を犯したために、アダムではなく、土がのろわれるものとなったと書かれてあります。その結果、苦勞して土を手入れしなければ、良い作物も実らなくなってしまうました。創世記3:23に、「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた」とあります。もともと、土を耕すということは、神様が人に与えられた奉仕の業でしたので、罪を犯し、エデンの園から追い出された後も、土を耕すという仕事を変わらずに残されたと言うこととなります。土を耕すことを通して、収穫の喜びにあずかれるだけでなく、神様の命の創造の業に触れることができるのでした。しかし、その働きは以前とは異なり、顔に汗を流すような苦勞の多いものとなったのでした。それは罪を犯した罰のようにも見えます。しかし、人間の罪のせいで土が呪われたにもかかわらず、種をまけば芽を出し、エデンの園ほどではなかったとしても、実を实らせたのです。ここに神様の赦しを見るのです。つまり、顔に汗して土を耕すことで自分の罪を思い起こすと同時に、収穫を得ることで神様の赦し、すなわち永遠の命の希望が残されていることを知るのです。

またエバに対しては、「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む」(創世記3章16節)とされました。本来、出産には痛みなど伴わなかったのでしょうか。おなかの中に命を宿すと言う経験は、命の誕生の喜びと同時に、神様の命の創造の業を体中で体験できる素晴らしい出来事でもあったはずですが、しかし、喜びに満ちた命の誕生に、痛みや苦しみが伴うようになりました。一見すると、それは罪の罰のようにも見えます。しかし、男の土を耕すときと同様に、女も出産の痛みを通して罪の自覚を生じさせると共に、命の誕生を通して、その罪の赦しと永遠の命の希望が残されていることを見出すことができるようにされたのです。本来、罪の結果は死でした。しかし、神様は永遠の命の希望をすべて取り去られたわけではなかったのです。